

## ウィーンが音楽の都と呼ばれる理由

● モーツァルト、ベートーヴェン…!

今日 19 日(水)は、今年度最後の「音楽の都ウィーンからの贈り物・富田千種氏による出張講演」を春日部市立江戸川中学校(大澤裕之校長・生徒数 77 名)で行いました。今回は、「音楽の都ウィーン」がその名を留めることになった作曲家たちの作品について生演奏を含めて学ぶという趣向で約 1 時間の講演を行っていただきました。

\* \*

### ◆ 音楽の素晴らしさに触れる

最初に、大澤校長先生のご挨拶です。「江戸川中学校は今週土曜日の合唱祭に向けて、毎日歌声に包まれた学校です。合唱では仲間と思いを共有すること、伝える技を身につけること、心から音楽を楽しむことと素晴らしさに触れることが大切だと思います。今日はそんな音楽の素晴らしさウィーンから教えてくださる講師の先生が来てくれました。」

そして、富田様の講演が始まりました。

\* \*

### ◆ 音楽の都ウィーンを築いた 4 人の作曲家

「皆さん、こんにちは。今日は『音楽の都ウィーン』のお話しをします。皆さんはウィーンが何処にあるか知っていますか? ドイツの隣にあるオーストリアの首都です。人口は 180 万人くらいの町で、1800 年頃はイタリア北部からチェコスロバキアまでを含めた広大なオースト



〔富田様と音楽の小森谷先生〕

リア帝国という国の首都でした。ハプスブルク家という貴族が治めていて、宮殿で音楽を楽しみました。そうした貴族たちのためにさまざまな音楽家が作曲をしました。その中の一人に、モーツァルトがいました。モーツァルトはそれまでのオペラが貴族のためのものであったのを、庶民にも分かる作品にしました。これから歌う曲は、そんなモーツァルトの代表的なオペラ『魔笛』の中から『俺は鳥刺し』パパゲーノのアリアです。ドイツ語で歌います。私はバリトンですが、男性には高い声のテノール、低音のバスがあります。バリトンは中間域です。女性ではソプラノ、メゾソプラノ、アルトですね。

この曲では鳥を捕まえることを職業としている鳥刺しが、得意に歌います。」〔最初の曲、パパゲーノのアリア『俺は鳥刺し』〕

「次は日本語の歌です。『かごかき』という歌ですが、籠を担ぐ人たちが大阪の名所を案内する曲です。先ほどの曲でも“ハイサ ホブサッサ”という歌詞があるのですが、『かごかき』の中でも“ホイサッサ”があります。お楽しみください。」〔二曲目『かごかき』〕

「日本の音楽は歌舞伎の中で歌われる『謡曲』などが伝統的な音楽でしたが、1868 年に明治維新になり、西洋文化と共に西洋の音楽が入って来ました。今、皆さんが歌っている歌い方は、人間の持つ声を自然な形で発生する出し方になっています。イタリア語では『ベルカント(美しい声)』という唱法です。今日は、そんなベルカント唱法をあとで教えます。三曲目はイタリア語で歌います。『帰れソレントへ』です。」〔三曲目は『帰れソレントへ』〕

「ウィーンの音楽の基礎を築いたのがモーツァルトです。今はクラシック音楽と呼ばれますが、当時は最新の音楽で、モーツァルトの曲を聴いて気絶する人も出たという記録もあります。先ほどのアリアがモーツァルトの曲で、次にベートーヴェンの曲を大館麗奈さんに弾いてもらいます。」〔ベートーヴェンの『ピアノ・ソナタ 31 番』〕



「17 歳の時にベートーヴェンはモーツァルトに会いにウィーンを訪れるのですが面会できずにドイツに帰ります。しかし、モーツァルトが若くして死ぬとハイドンがベートーヴェンを後継者として据えます。ベートーヴェンは先ほどの曲を作った 1820 年に耳が聞こえなくなり自殺を考えたのですが、それをしなかったのは音楽があったからです。そして、耳が聞こえなくてもこれだけの曲が完成するのです。この 3 人までがクラシックと呼ばれる音楽です。その後に出て来るシューベルトやシューマンはロマン派と呼ばれます。シューベルトの代表作『菩提樹』のさわりを聴いてもらいますが、ベートーヴェンまでは伴奏が和音で支えられていましたが、シューベルトの曲では前奏でテーマが表現されます。『菩提樹』では木々にそよぐ風が感じられると思います。」〔シューベルト『菩提樹』〕

「最後がワルツのヨハン・シュトラウスです。こちらは CD で。こうしてウィーンでさまざまな曲が生まれ、音楽の都と呼ばれるようになるのです。」〔略〕。「最後に『翼をください』を皆さんで歌います。全員立って腹式呼吸をやってから歌いましょう。」完